

ある

三文作家

が見た

もの

Yamamaka Tomotaka

山中與隆

Duo-Yamanka

ある三文作家が  
見たもの

---

山中與隆

## 目次

ある三文作家が見たもの

1

編者あとがき

120

ある三文作家が見たもの

作 山中與隆

テレビの推理ドラマではなく、現実に自分が住んでいるマンションや近くのマンションで殺人事件などがおきるということは、そうあるものではない。自分が被害者とか加害者でなくても、何らかのかた

ちで事件に関わった経験となるとさらに珍しい。

私にはその経験がある。事件の全貌はわからないままであつたが、事件の断片に関わつたことは間違いない。これからそのお話をしよう。

私は十三階建のマンションの十階に家内と二人で住んでいる。私は南西向きの部屋の窓際に机を置いて書き物をしている。まあ一応小説家のはしくれと

思ってもらつていい。

幸いにこのマンションは目の前に視界をさえぎるような高い建物が無い。周りに建物は多いが、私がある十階の窓よりも低いものばかりだ。高い建物は離れたところにしかないので、遠くの山並みも見えて、そこに沈む夕日を眺めることも出来る。

私は仕事机のそばに双眼鏡を置いている。もちろんそれで近くのマンションの窓を覗くためではない。

実は遠くに瀬戸内海があり、直接海面は見えないがそこを通る船が見える。船に気がつくとは私は双眼鏡でしばらくそれを眺めるのが好きなのである。

双眼鏡は隣のマンションの窓を覗くためではないといったが、何となく双眼鏡で眺めているときに、ひとつこちら向きのとても広い窓があるマンションに気づいた。私が住んでいるところなどに比べると、いかにも高級マンションという感じで、その広い窓

が少し羨ましかつた。そのマンションが何階建てなのか、下のほうがほかのビルに隠れているのでわからないが、私の部屋との関係で推測すると十階建てくらいかもしれない。そのマンションの上から三つ目の階の広い窓が、いつも煌々と明かりがついて、薄手のカーテンが印象的なので、つい双眼鏡を持つと見てしまう。だからといって明るく照らし出されているカーテンが見えるだけで、それ以上何も見え

ることではない。いや、『なかつた』というべきであるう。

私の窓からそのマンションまでは、直線距離で五、六百メートルくらいであり、そのマンションの広い窓のある面と玄関がある外廊下の面とが見えている。

ある夜、私がたまたま双眼鏡でその明るい窓を見たとき、カーテンに激しい人の動きが映った。それ

は二人の人間が争っているように見えた。明らかに一方が他方を殴るような動きで、殴られた方が逃げたのか倒れたのか、あるいは争いが窓から離れたところに移ったのか、それきりそのような影は見えなくなつた。

私はしばらく双眼鏡を離さなかつたが、その間にふたたび人影が見えることは無かつた。

見えたのはシルエツトだけで、それも短い時間だ

ったので、争っていたのが男と女なのか、男同士なのかもよくわからなかった。男と女だとしたら、夫婦喧嘩かも知れない。それにしても相当激しい喧嘩だ。殴る方は大きく腕を振り上げていたから、ありふれた夫婦喧嘩ではなく、最近ニュースなどでよく聞くドメスティック・バイオレンスというやつかもしれない。いずれにしても、羨ましいような高級マンションに住む人たちも、そのなかでは必ずしも明

るく楽しい暮らしが営まれているとは限らないよう  
だ。

気になつた私は、それから三日間くらいは夜にな  
るとその窓を双眼鏡で観察した。平たくいえば覗い  
たというべきかも知れないが、一応物書きの私とし  
ては観察といわせてもらふことにする。しかし明か  
りはいつものように点いているが、少なくとも私が  
観察したときには何事も無く、人影がカーテンに映

ることとも無かった。もつともよつぽど窓の傍で何事かが起こらなければ、このように遠くから一つの窓だけを見ている者には、その家の中が平穩だったのかどうかはわからない。

それから十日くらいした夜、久しぶりにどうなつたかと思つて観察してみた。いつもものように窓は明るく、カーテンが半分くらい開いていて、テレビが映っているのが見える。

突然双眼鏡の視界にもつれ合つて窓の方に倒れこむ人影が映つた。やはり争つている二人の人間のようだ。人影は起き上がると窓から離れていったが、またすぐに窓に近づき、一人が腕を振り上げてもう一人の方を殴るのが見えた。何度か腕を振り上げて殴るのが見えたが、やがて一人は窓から離れていった。殴られた方の姿は見えない。テレビは点いたまままで、画面がちらちらと動いている。私はそのまま

十五分くらいじつと見続けたが、変化は起こらなかつた。一時間たつても二時間たつても部屋の明かりは点いたまま、テレビも点いたままであつた。すでに夜中の十二時近かつた。

私は、家内にはこの窓の一件を話さないことにした。私の小説のネタになりそうなものは、家内には話さないことにしている。うっかり話すと、家内は勝手に物語を作つてあれこれ私に話しかけてくるの

で、私の構想の邪魔になるからだ。たまにはその中におもしろいアイデアがあることもあるが、それを頂くというのもあまり気分のいいものではない。

翌晩もその窓に人影が現れた。十一時ころだろうか、この日は殴ったりはしていないようだが、二人は手を振ったり、地団太踏むような格好をしたりして言い争っているようにも見える動きだ。そのうち一人が部屋の奥に消えた。もう一人のほうはカーテ

ンにシルエットを映したまま立っている。女だ。それもシルエットで見ると限り裸か下着だけかといった感じである。こうなると私の観察は限りなく覗きに近くなってきたが、限られた期間内に三度もこのような影が現れると、私ならずとも関心が強まるのは致し方ないだろう。やがて裸かもしれない女のシルエットも部屋の奥に消えていった。

こんなある日私は近所の果物屋に散歩がてらでかけた。それは果物の専門店で、小さい店だが評判が良いらしくいつも狭い店内は混んでいる。そこで買った果物は失敗したことが無いので、我が家でも時々利用している。

その店で私は大きなサングラスをかけたいかにも都会風の女性が果物を買いに来ているのを見かけた。女性の年はよくわからないが四十前後ではないだろ

うか。このあたりの奥さんたちとは服装も髪型も少し違っていて、いかにも都会風の優雅な奥様といった雰囲気である。もちろんこの街もひどく田舎というわけではないし、いろいろな人が住んでいてもおかしくない。ヒールの高いつつかけを履いているところから、この近くの住人らしい。そうはいつでもやはりちよつとこの街に似合わない雰囲気を感じただけでなく、私はその女性のサングラスのかげに痣

のようなものを見たのである。サングラスだけでなく化粧でも隠しているのかそれほど生々しくはないが明らかに痣だ。私はその瞬間、あの窓の中で殴られた人ではないかと直感した。私が二度ばかりその人の痣のあたりを見たので、その人は気がついたと見えて、私を険しい表情でにらんでから、買った果物の袋を提げて店を出て行った。その店には数台分の駐車場があり、そのときも何台か停まっていたが、

彼女は車ではなく歩いて帰っていった。

もちろんその人が窓の中で争いを見せていた人物の一方であるというのは私の想像でしかないのだが、もしそうだとしたら、あのような女性がカーテンに裸のシルエツトを見せながら誰かと争い、あるいは殴られていたのだと想像すると、ことはますます生々しく感じられてきた。

私は特に用はなかったが、ある日の昼間に散歩を

装つてそのマンションの前の道を歩いてみた。普段の私の行動パターンでは通る必要の無い道である。私が歩いたのは例の広い窓の下の道である。それは車二台がやっと離合できるくらいの生活道であつた。マンションの外廊下側の下にはそのマンションの玄関と駐車場スペースがあり、私が通つたときにはまばらに車が停めてあつた。高級マンションと思つたわりには特に高級車や外車が並んでいるわけではな

かった。外廊下と反対側の長い面は、西向きということになるのだが、どこのマンションとも変わることなくテラスには洗濯物が干してある。私が注目している窓の部屋は七階建ての五階だった。問題の部屋のテラスにも少しの洗濯物がかかっていた。ありふれたタオルやブラウスのようなものであった。

私は家に帰ってからあらためて双眼鏡で例の窓を見た。昼間なので中の様子はわからないが、何事も

ないようにカーテンが風に揺れていた。しばらくしてもう一度双眼鏡をのぞくと、例の広い窓から女性と思しき人物が、身を乗り出して下のほうを見ている。何をしているのかはわからないが、その人はかなり長い間そうしていた。その人が果物屋で見かけた婦人かどうかまでは、私の安物の双眼鏡では確認できなかつた。

そのときこれまで気がつかなくなつたのだが、広い

窓の隣に幅の狭い窓があり、その窓の枠に防犯カメラのようなものを取り付けてあるのが見える。もしそれが防犯カメラだとしたら、組関係の事務所などにある外部監視用のカメラを連想させる。今度近くを歩いたときに確かめてみよう。

それから二週間以上経ったとき、ひとつのニュースが全国放送で流れた。あるマンションから男性が

転落死したというのだ。警察は自殺、他殺の両面で調べているとコメントされていた。

このニュースは、私にとって大ニュースだった。事件が起きたのはこの街の何処かのマンションだというのだ。私は、テレビに大写しされた高階の外廊下付近や、男が転落したというあたりの地面の映像を注意深く見たが、私が観察しているマンションかどうかは特定できなかつた。テレビでは、マンシヨ

ン名や外観全体がわかるような映し方をしていたのか  
ったのだ。しかし、もし私が観察しているマンション  
ンのことだとしたら、そばに行ってみたら警察が何  
かを調べていたり、黄色い規制線のテープが張り巡  
らされていたりするかもしれない。それに報道陣も  
来ているかもしれない。

私はまたそのマンションのそばを通ってみた。し  
かしそのときは、それらしいことは何も見られなか

った。私が歩いたのは、転落事故からすでに三日経っていたから、一通りの調査は終わっていたのかも  
しれない。私はマンションの周りを回るように歩いてみたが、転落があったのがどの地点だったのか、  
テレビに映し出されていた場面を思い起こしながら  
見たがわからなかった。やはりこのマンションでは  
なかったのかもしれない。

ただこのとき例の部屋の防犯カメラのようなもの

を下から見ることが出来た。やはり組事務所に取り付けてあるような監視カメラに見えた。

このニュースは、民放のニュースワイドでも取り上げられはじめた。それによると、何故そのマンションの住人でない男性が転落死したのかが疑惑をはらんでいるということが、話題にされている。つまり転落死したのは、そこの住人ではなかつたのだ。私は次の日も朝夕マンションの周りを散歩した。

しかし一度も警察や報道関係者の姿は見なかった。

あれだけいろいろな民放局がニュースワイドでやっているのに、現場付近に誰もいないというのはおかしい。やはり別のマンションだったのかも知れない。私の想像は先走りしすぎていたようだ。

しかしそのニュースワイドも、政局の動きが活発になったのを受けて内容がそちらに移り、転落事故のニュースは、何の解決も伝えないままブラウン管

に出なくなつてしまつた。

そんなころ、私がエレベーターで下りていると、どこかの階でエレベーターを待ちながら話している女性同士の声が聞こえてきた。

「テレビでやっていた転落死のマンション、そのグリーンヒルマンションですつて」

そこまで聞こえたときエレベーターが止まり、いま話していたらしい二人が乗つてきた。彼女たちは

私がいたのでその話の続きはせず、私に会釈したただけで一階まで無言だった。

私はそのとき近くにある家電量販店にインクジェットトのスペアを買いに行くところだった。そのまえに例のマンションのところに行くことにした。というのは、私は何回もマンションを観察するためにその周りを歩いたにも関わらず、不覚にもマンション名を確かめていなかったのだ。

マンションの玄関は駐車場のある側に二か所あるエレベーター塔のところにあつた。駐車場は私有地だつたので、これまで私は入り込んでいかなかつた。しかし今日は重要な目的のために敢えて入つていった。ドームのような屋根の玄関ホールが突き出して、中には訪問先を呼び出すための設備が見えている。ここはオートセキュリティになつてゐることがわかつた。そして肝心のマンション名はドームに

なつた玄関の上のほうにカタカナで『グリーンヒル  
マンション』とあつた。エレベーターで聞いた名前  
と一致する。私は大収穫を胸に帰宅した。インクジ  
エットを買うのを忘れて帰ってしまったので、夕方  
もう一度そのために出かける羽目になつた。

それにしてもあのマンションの周りは静かだ。一  
時期とはいえニュースワイドに出たり、それだけで  
なく近所の奥さんまで知つていふというのに、見物

人が押しかけたりもしないものらしい。テレビに出るようなものには必ずやじ馬が押し寄せるものだというのは、私の思い過ぎだったのだろう。

その後も五階の窓は煌々と明かりが点き、いつもテレビが点いていた。それから私は頻繁に観察をしたが、以前のような暴力沙汰のシルエットにお目にかかることはなかった。転落死と窓の暴力沙汰とは関係無かったのだと私は思い始めた。

テレビでは、転落死した男は自殺の可能性もある  
といていた。何らかの方法でオートセキュリティ  
を潜り抜けて、目的を果たしたのだろうか。テレビ  
ではたしか駐車場側で、そのときたまたま車が停め  
てなかった部分に転落したといていた。何階から  
落ちたのかはわからないともいていた。自殺志願  
者だったのなら、なぜ七階くらいではなくもつと高  
いマンションを選ばなかったのだろうか。

例の果物屋で二度目にあのサングラスの女性を見かけたのは、さらに一週間くらい経ったころだった。私がみかんを買って店を出ようとしたときに彼女は入ってきた。やはり大きなサングラスをしている。私がチラッと見ると、彼女も私を見返した。距離が近かったのでサングラスの中の目が大きく見開かれるのが見えた。私はなんだか背筋にゾクツとするものを感じた。しかし私は買い物をすませていたので

ぶらぶら歩いて帰り始めた。彼女は買い物のため店の中に入っていった、はずであった。しかしすぐ背後から小走りに近づく足音がしたかと思うと、

「ちよつと」

と、私は呼び止められた。振り向くと彼女だった。優雅な奥様とは思えない何となくドスの効いた声だった。私は、さつき店で視線を合わせたときの目のギョロつきがあつたので、その声に違和感は無かつ

た。ただ面倒なことになったと思つた。彼女は、

「あなた、この前も私のことをジロジロ見てましたね。何かあるんですか」

という。以前同じ店の中でサングラスの陰に痣があるのを見つけたときのことをいつているようだ。私も隠さずにありのままを答えた。

「あのかきは、この辺では珍しく都会風のご夫人だと思つたのですが、目の辺りに痣があるのに気がつ

いてしまつて、何回か見てしまいました。どうも大変失礼しました。お詫びします」

と、これだけで決着をつけようと下手にでた。ところが夫人は、

「それだけじゃなくて、あなたどこのどなたか存じませんが、私のマンションの周りをしよつちゅううろついているようです。いったい何の目的があつてそんなことをするのですか」

何故それを知っているのだろうか。あのマンションの近くに行つたときに、この夫人はおろか住人らしい人物と出くわしたことも無いと思つていたのに。やはりあの監視カメラだろうか。私はとつさに、

「あなたのマンションってどこのことですか」  
と聞き返した。その夫人があのマンションの例の部屋の住人かどうか、本当のところを私はまだ知らないのだ。

「そのグリーンヒルですよ。知っているくせにどうして聞くんですか。それより、どうしてうるついたりしたのか聞いているのです」

部屋まではわからないが、この女性があこのマンションの住人であることが確認できた。見ると前回曲がっていった彼女のマンションへの道をすでに過ぎているのにまだついてくる。相手が女だといつても、絡んできているだけに不気味である。しかし、普通

では得がたい情報も得られそうだ。私はこういつてみた。

「確かに私はお宅のマンションの付近を歩き回ったことがあります。それは転落事故のうわさを聞いたからです。テレビでもやってましたから」

「嘘、おっしやい。あの事故よりずっと前からうろついていたじゃありませんか」  
やはり監視カメラに違いない。

「それはたまたま散歩したことがあるから、そのときのことをおっしやっているのですね」

「それにしては、盛んに上の方を見上げていたですよ。まるで私の部屋を観察しようとしているようじやないですか」

私は思わず、五階なのかと聞きたくなくなったが、聞かなかつた。

「それは思い過ごしです。それよりあの転落事故は

何だったのですか」

私は思い切って聞いた。彼女はまだ私の進む方向に追いかけてきながら、

「あのマンションに関係の無い人のことなので、私は何も知りません。それよりあなたのお住まいは何処なのですか」

「どうして私の住まいなど訊くのですか」

「最近私のことを探っている人がいるような気がします」

るからです」

「それが私だというのですか。とんでもない濡れ衣です」

私は、住んでいるところを知られてしまうと面倒なことになりそうな予感がしたので、曲がるべき道を通り越してそのまま歩き続けた。彼女はまだついてくるので、

「何かほかにありますか？」

私は彼女との会話を打ち切りたかった。

「お住まいは教えてくれないのですね？」

「そうです」

私はきつぱりといった。すると、

「わかりました、じやいいです」

と、私についてくるのをやめた。二十メートルくらい行ってから私が振り返ると、彼女はまだ立ち止まったまままで私のほうを見ていた。何処で曲が

るか確かめようとしているらしい。それにしても女だてらにあの態度は只者ではない。おそらく背後に誰かがいるに違いない。それに何か警戒しなければならぬ事情を持っているのだ。

私は普段自分が曲がるべき道から百メートル以上先の路地を左に折れた。そのとき後ろを見たら、女はさっきの場所よりもかなりこちらに寄ったところから私の曲がるところを見届けようとしているよう

だ。明らかに私をつけている。私は歩を速めて懸命に歩いた。出来るだけ関係の無い方向に曲がったり、必要以上に遠くまで歩いたりした。時々振り返ってみたが、もうついて来ているようすはなかった。ずっと離れた広い道を私のマンションの方角に向かい、マンションの前の道に入った。注意深く後ろを見たが女の姿は無かった。たかが一人のおばさんにつけられただけなのに、私は恐怖感を覚えて必死になっ

て汗ばみながら歩いた。無事マンションの駐車場に入つたとき、前方にチラツとあの女の姿が見えたよ  
うな気がした。私はあの女かどうか確かめたかつた  
が、もう一度覗いて見つかつたらいやである。不安  
はあつたが私はそのままエレベーターで十階まで上  
がつた。ここで私はバカなことをしてしまった。十  
階でエレベーターを降りたときに、すぐに家の中に  
入れればよかつたのに、手すりに寄つて下を見たので

ある。彼女を確かめるためではなく、ときどき、ここから真下に落ちたらどうなるかと思つてみる事があつたので、転落事故のこともあつてつい無意識に見てしまつたのである。道路と駐車場の境の辺りに女は立つて、こちらを見上げていた。私はわざわざ自分のマンションばかりか、部屋まで教えてしまつたのである。このマンションの十階には二部屋しかない。しかももう一部屋はいま空き家になつてい

る。ここまで来たなら仕方が無い。私は諦めて部屋に入った。

「いったいどうしたの」

玄関に出てきた家内はハアハア息を切らせている私に聞いた。

「ちよつと早足で歩いてきたから」

とだけいって、ことの次第は何も話さなかつた。

翌日、警察のものだと名乗る私服の男が二人訪ねてきた。少々話が聞きたいという。警察手帳というのだろうか、警察のマークがついた黒い表紙の手帳を示したので、部屋に上げた。彼らは簡単に自己紹介をしたあとすぐ用件に入った。年配の方が、

「長谷川翠さんをご存知ですね」

といきなり聞いてきた。聞いたことも無い名前だ。知らないというところ。

「先方は、あなたが自分のことをいろいろ調べて、わかったことをあるところに連絡しているらしいといっているんですが、心当たりはありますね」

私には何のことかわからなかったが、昨日例のサングラスの女に住まいを確かめられたばかりだったから、何かそれと関係があるらしいことは想像がつく。きつとあの女が私のことを警察に訴えたのだ。

「その長谷川さんというのは、サングラスをかけた

女性で、グリーンヒルというマンションに住んでいる人のことですか」

と逆に聞いてみた。常にサングラスをかけているわけでもなからうが、私は彼女がサングラスをかけている姿しか見たことがなかった。

「やっぱりご存知だったのですね。それで長谷川さんの行動を調べて黒川学という人物に連絡したのですね。黒川とはどういいうご関係なのですか」

「黒川さんなんて人は知りませんし、連絡なんか誰ともしていませんよ」

「しかしね、長谷川さんがいわれるには、誰かが連絡を取らなければあんなことにならないはずだとおっしゃってるんですよ」

「長谷川さんがどういわれようと、その黒川とか連絡とかいう話は、私とは無関係です」

「そうですか。長谷川さんはあなたが何度もグリー

ンヒルマンションの周辺をうろついているのを目撃しているとおっしやつているんですがね」

「散歩であのあたりを歩いたことはありませんが、何かを調べたり、連絡したりは何度もいつているようにまったく私とは関係ありません。だいたい『あんなこと』というのは何のことですか」

『調べたり』というところは多少嘘の要素はあつたが、いずれにしても質問されているようなことに関

してはまったく知らないことである。私は彼女のマ  
ンションに取り付けてある監視カメラのことを確か  
めてみた。すると、

「やはり部屋までご存知じゃありませんか」  
と、私の言葉を逆手に取ってきた。しかしそれで、  
私は彼女の部屋が確認できた。

彼らは私が聞いたことには答えずに、  
「そうですか。じゃ、また何かありましたらお話を

伺うかもしれませんが、今日はこれで失礼します』  
と、いって意外にあっさり退却した。私がいったこ  
とを信じたのか、それとも嘘をいつていると思つた  
のかどちらかだ。

それにしてもあの長谷川翠という黒いサングラス  
の女は、どうして私をそのようなスパイまがいの人  
間と見たのだらうか。しかもわざわざ跡をつけて住  
所まで確かめたのだ。

そういえば彼女が私の跡を追かけたとき、私が彼女をまこうとして遠回りしたり、関係ないところを曲がったりしたのにあまりついてこないで、私が自分のマンションの前に戻ってきたときに姿を見せた。あたかもそこに戻ってくることを見越して待っていたようにも思える。つまり彼女はそのときすでに私のマンションをだいたい知っていて、最後の確認だけしたかったのかも知れない。私の部屋まで特定さ

れてしまったのだから、彼女にとっては大いに収穫のある追跡だったことになる。

事前に知っていたとすると、別るときに私は彼女につけられていて、少なくとも最初の曲がり角くらいまでは突き止められていたのかも知れない。彼女は自分のことを黒川という男に通報されるのを恐れているらしい。転落死した男のことを、彼女は関係ないといっていたが、本当に関係ないのだろうか。

警察が調べているのは、あの事故と関係があるからではないのか。情報は増えたが、謎は一層深まってきた。

警察が来たことで、この一連のことを家内に話さないわけには行かなくなった。私は、窓から見えるグリーンヒルマンションを指しながら、ことの次第を説明した。私が、世間のあらゆることに取材と称して関心を示すのには慣れていたので、家内は特に

驚いたりはしなかつた。

私はこの一連の事件を次のように推理してみた。

窓に映つた、女を殴っていた男は黒川であり、殴られていた女は長谷川である。黒川は長谷川の内縁の夫かあるいは愛人である。マンションには黒川が住まわせているのかもしれない。ただし同居はしていない。

黒川は女に暴力を振う癖があり、長谷川は縁を切りたいと思つてゐるが、逃れられないでゐる。長谷川は何かと自分の日常の行動が監視されてゐて、誰かスパイのように自分を監視する役の人間を黒川が雇つてゐると思ひ、私をその雇われた人間ではないかと疑つた。しかし私は長谷川の監視役として黒川に雇われた人間ではないから、実際には誰かほかにその役を果たしてゐる人間がゐることになる。その

人間は、長谷川に関して私なんかよりもずっと詳しい情報を得ることの出来る立場にある人間である。

一方、転落した男は長谷川のもう一人の愛人で、長谷川としては暴力を振われて何とか逃れたいと思つている黒川とちがつて、慰められ、黒川から護つてもらいたいと思つている存在であつた。転落死した男も長谷川のマンションで逢瀬を繰り返していた。これが、私がこれまでに得た情報をもとに想像し

た状況である。

それから三か月くらいしたとき俄かに、再びあのマンション転落事故のニュースがニュースワイド番組に登場した。そこでは相関図つきの解説が行われていた。それによると、だいたい私の推理と大筋で一致していた。ただ大きな違いが一つあった。それは転落死した男は長谷川のもう一人の愛人ではなく、

彼女の弟だったのだ。それでは、私が推理した長谷川の部屋を訪れた黒川以外の愛人がいるとすれば、それは第三の人間ということになる。そのような者が本当にいるのかさえも怪しくなってきた。また弟は何をしに姉である長谷川翠のマンションを訪れたのだろうか。もちろん弟が姉を訪ねても不思議ではないが、なぜその姉のマンションで転落死したのか。

しかし謎が多いだけでは、ニュースワイドのネタ

としては続かない。やがて話題は、延々と続いていく政局の混乱話に移っていった。

それからしばらくは、あの窓にはこれまでどおり明かりが灯り、テレビが点いていることもあった。カーテンが半分開いていることもよくあった。しかし、何時のころからか明かりが点かなくなつた。毎晩気をつけてみたが、十日間くらい明かりが点かない日が続いた。それだけでなく窓の様子もおかしい。

私はまたグリーンヒルマンションの近くを散歩してみた。五階の窓を見上げるとカーテンがなくなつて、窓の内側には黒いビニールが張られている。例の監視カメラと思われるものもなくなつてゐる。

私は玄関に回つて、郵便受けを調べてみた。五階の部屋が一つだけ名前の無い部屋になつてゐる。長谷川という名前はほかにも無かつたし黒川というのもなかつた。引越したらしい。ついに彼女は黒川

から逃れることが出来たのだろうか。

彼女が引越したことで、私がこの度の事件で得られる情報は途切れることになった。

しかし、私としては自分の小説の世界ではなく、現実のこととしてこれらを結び付けたいという衝動に駆られた。

手がかりを見つけるためということもあり、私は

パソコンで何気なく長谷川翠の名前で検索してみた。長谷川翠という名はいくつかヒットした。その中には記載事項の多い長谷川翠さんもいたが、地域的に関係なさそうである。一方、黒川学の方は、これも同名の人は大勢いるようで、有名人もいろいんな分野の方がいることがわかった。しかし、これでは今回の事件と関連する人物を特定する手がかりにはならない。そこで黒川の名を冠する会社を検索してみ

た。まず建設会社に当たりにつけると、結構あつた。

その中でこの地域に絞ると、黒川国際建設有限会社  
というのがあつた。これは名前からして何となく調  
べてみたくなつた。私はデータにあつた所在と電話  
番号をメモした。

まずは車でその会社の存在を確かめに行くことに  
した。それは私の家から四十キロくらいの山間部に  
あるらしい。

翌日は朝から快晴で絶好のドライブ日和であった。山間部に向かう道路は、一応国道となっているが、谷川沿いの曲がりくねった道であった。小一時間走ると小さな町に出た。町は狭い谷間に沿っていて、見たところ道筋には建設会社らしいものは見当たらない。そのまま走ると街並みはすぐに途切れ、再び谷川沿いの道になった。まもなく前方に鉄製の扉に囲まれた工場か工事現場のようなものが見えてきた。

私は速度を落としてよく観察しながらその傍を通つた。塀の中ほどに鎖で巻きつけられて南京錠がかかつた扉があつた。

私は車から降りて、鉄の扉の隙間から中を覗いてみた。中はただ川原の荒地を囲つただけのようになつており、そこに建設廃材のようなものが山積みさされてゐる。そしてさび付いたようなシャベルカーが一台放置されていた。そのシャベルカーの車体に黒

くK・K・Kと書いてある。黒川国際建設のイニシヤルと読み取ることできる。場所としてもカーナビの住所表示と、インターネットで調べた黒川国際建設有限会社の所在地と一致する。しかし、ここには人ひとりいないし、事務所のようなものも無い。黒川国際建設有限会社には違いないが、ここはその廃材置き場であって、事務所はどこか別の場所にあるのだらう。しかしインターネットの情報では、こ

このことしか出ていなかった。

そういえばインターネットからメモした電話番号は、この山間部の番号ではないことに気がついた。市外局番からすると私が住んでいる隣の政令指定都市の番号だと思われる。私はそこに電話している。ろ確かめたい気持ちだったが、そういう勇氣はなかった。

家に帰ってから電話帳で調べてみると、確かにそ

の会社名で、私がメモした番号が載っていた。単なるダミー会社のようなものではなさそうだ。電話帳には町名番地まで書いてあった。『昭和町二丁目三番地』。私はメモに書き取ってポケットに入れ、早速その場所に行ってみることにした。都会の街中だと車ではゆっくり探せないので、電車で行くことにした。

昭和町二丁目三番地はすぐにわかった。五階建ての古ぼけたビルの入り口近くの白い壁に、その番地

を書いた緑色の縦長のパネルが貼ってあった。雑居ビルのようにだったので、私は中に入ってみた。まず入り口すぐのところにも十五個くらいの郵便受けが並んでいる。どれも鍵などかかかっていないで、投げ込まれた広告がだらしなくはみ出している。二、三を除いて部屋主の名前も書いてない。私が探している会社の名前は無く、黒川という名前も無かった。ちよつと不気味だったが、薄暗い一階の廊下を一番奥

くまで歩いてみた。一番手前に『管理者』と小さく書いた部屋があつたが、あと三つくらいある部屋には表札などまったく無かつた。人が住んでいる感じさえしない。

エレベーターもあつたが、私は狭い階段を二階まで上がり、廊下を端まで歩いた。扉に「二宅××」という名刺が貼つてある部屋があつたが、それ以外に表札はない。そのようにして私は五階まで進んだ。

いくつか表札のある部屋はあつたが、探している名前には出くわさなかつた。五階の廊下を端まで調べた私は、もう一度確かめながら降りることにした。

そのようにして三階まで下りて廊下を歩いているとき、エレベーターを待っているおばあさんに出会った。私は出来るだけ愛想の良い笑顔を作つて尋ねてみた。

「このビルに黒川建設という会社があると聞いてき

たのですが、ご存じないですか」

おばあさんはちよつと考えてから、

「国際建設のことかなー」

と返事した。私はすかさず、

「あー、きつとそれです。黒川国際建設有限会社と  
いうのが正式の名前だと思いますから」

と行って返事を待った。おばあさんは、

「それだったらこのビルのオーナーさんやわ。一階

のどつっきの管理者って書いてある部屋やけど、最近なんか知らんけど、ずっと留守みたいやな」と教えてくれた。

やはり問題を起こしたために姿を見せなくなっているのだ。問題というのはきつとグリーンヒルマンションから長谷川の弟を突き落として殺したか殺させたことに違いない。私の想像は広がった。

私は帰宅すると、もう一度グリーンヒルマンション

ンに行つてみた。玄関のポストを調べたら、一階の端の方に、名前の横に管理人とカツコ書きした部屋を見つけた。さっきのビルで気がついた知識が早速役立つた。

私は思い切つてその管理人と書かれた家の番号のブザーを鳴らした。すぐに

「はい、××です」

とインターホンに明るい女の声が返つてきた。

「私、五階の長谷川さんを訪ねてきたものですが、このところずっとお留守みたいなのですが、何かご存知ないでしょうか」

と聞いた。初めて訪ねて来たのに『このところずっと：』』』というのは、下から見上げた窓のようすで、引越してしまっていると思つたことによるハツタリである。返事が返ってきた。

「長谷川さんなら先月お引越しされましたよ」

予想通りである。

「お引越し先はわかりませんか」

と聞いてみたが、これには案の定、

「それはお聞きしていませんので」

という返事だった。管理人であれば何らかの必要があつて必ず転居先か連絡先を知っているはずである。しかしみだりに知らない訪問者に教えるはずは無い。ましてや、あのような事件があつたかもしれない人

物のことである。

私は、この日はひとまず帰宅したが、翌日近所の派出所に出向いた。そこで、以前警察の人が私のところに来て、転落事件のことで職務質問を受けたことをいい、そのときに話さなかつたことがあるので、知っていることを全部話したいから、担当の部署を教えて欲しいといった。派出所の警察官はすぐに本庁に電話してくれた。そして、そういうことなら一

度本庁においでいただけないだろうかという返答を伝えてくれた。私は、今からでも都合は悪くないのだが、というと、

「それならこれから自分が本庁に行く用件があるので、お送りします」といふことになった。このようにとんとんところが進むのは気持ちがいい。

私は、本庁の中にはテレビの刑事もので見るよう

に、『マンション殺人事件捜査本部』などと書いた部屋があるのかと思つたが、それは無く広いフロアにたくさんのデスクが並び、それぞれ机について仕事をしている間を案内されて、壁際にしつらえられたパーティションで囲まれた応接コーナーに通された。しばらくすると、婦人警官らしい人が茶を出してくれた。私は出された茶を飲み終えて、かなりの間待った。やっと二人の男がやってきた。二人とも我が

家に来た顔だ。しかし、我が家に来たときとは打つて変わった愛想のよさで、

「お待たせして申し訳ありません。例の件でちよつと取調べがあつたものですから。やー、すっかりお待たせしてしまいました」  
とニコニコ顔である。そして、

「例の件、ご存知ですよ。マンションの五階から転落したのは、他殺の線で捜査が進んでいるのです

が、一応容疑者の身柄を拘束している段階です。我々がお宅にお邪魔したときは、なにしろ事件が起きたばかりで、被害者のご家族の情報など我々も必死で手がかりを探していたものですから。その節は失礼があつたと思ひますがお許しください」と断りを言った。

「で、今日はわざわざその件に関する情報をご提供願えると伺いましたが」

私は、事件より前にたまたま明かりの点いた窓の中で女の人が誰かに殴られているらしい様子を二回も目撃したこと。そして黒い大きなサングラスをかけ、目の周りに痣のある女性に跡をつけられ、自分の家を確かめられたことなどを話した。私の意図は、このように知っている情報を提供することで、逆に事件に関することを聞きだすところにあつた。

現に、黒川の会社のビルに行つて、彼が何らかの

理由で今はいないようだという情報と、今しがた聞いた『容疑者の身柄を拘束している』という情報は結びついたのである。あとは長谷川のことについて何か情報が欲しかった。

「長谷川という女性が、私を黒川という人に雇われたスパイだといって、あなたたちに調べるようにいったのだと思いますが、黒川という人に長谷川さんの情報を流したのが私ではないことははっきりした

のですか？」

と聞いてみた。あれ以後何も警察に聞かれていないから、おそらくわたしのスパイ容疑は晴れているのだらう。しかし、はっきりと間違いだつたといわれたことは無い。たつたいま、その折には失礼しました』といったのが、私を疑つたのが間違いだつたと正式に伝えたつもりだつたのだらうか。

「ええ、はっきりしました。黒川に長谷川さんの情

報を流していたのは転落死の被害者自身だったよう  
です」

これは驚きの新情報だった。

「それ長谷川さんの弟さんでしょ。その弟さんがど  
うしてそんなことをしたのですか。それにどうして  
殺されたのですか」

私は思わず聞いた。黒川が直接にしる間接にしる加  
害者だというのは今のところ私の推理でしかない。

確かめたいところだ。

「それはまだわかっていません。何しろ関係者たちの人間関係は大変複雑だったようで、動機などの解明はこれからです。ですから今日お話くださった件も、大いに参考になります。ありがとうございますました」

もうごちやごちや聞かずにお引取りくださいということらしい。

「黒川という人が容疑者なのでですね」と私は聞いてみた。

「いまは、その件はお話できません」という返答だ。

「長谷川さんという方はお引越しされたんですね」とも聞いてみた。

「ええ、しかしそのへんのことも今はお話できません」

ただ退去するとき一人が、また何かあつたら教えてくださいといつて、名刺をくれた。警察の人の名刺は初めてだったが、刑事部犯罪捜査課という部署の名前と石田何がしという名前が書いてあるだけの特に変つたものではなかつた。

私は自分の持ち札を出したが、得られた収穫はさして大きくなかつた。いずれにしても長谷川の情報が無いことには関係者たちの線は繋がらない。私は

行き詰ってしまった。勿論行き詰ったといつても、単なるやじ馬的興味の世界での話で、深刻というわけではない。いや、その時点では深刻ではなかった。

私はある日陽気に誘われて車で、以前黒川国際建設を探しに行つた山間部の谷川沿いの道を走つた。

黒川国際建設と思われる鉄の囲いの前を通り過ぎたとき、鉄の扉が四分の一くらい開いていて、建設

廃材が山積みになつて見えている。そしてその前に黒塗りの高級乗用車が停まつている。乗用車のトランクが開いているのまで確認できた。私は百メートルくらい先まで走つて少し広くなつて道路わきに車を停めた。少し怖くて躊躇する気持ちも働いたが、私は車から降りてその工場の方に歩いていった。道路に面した鉄の囲いは高くて中を見ることが出来ないが、川原側の横の方は囲いの背は低

く、一部工事現場の衝立のような、上半分が金網になつたものでつないであるところもあつて、私は近づきながら中の様子を見る事が出来た。私が歩いていく方向から高級乗用車は見えなかつたが、さび付いたような重機は見えた。それが動いているではないか。建設廃材を動かしているのか、穴を掘っているのかといった動きに見える。私はそれ以上近づくこと高い塀に隠れて見えなくなるといふところでした。

ばらく立ち止まつて中の様子を見ていた。重機のシヤベルは向こう側を向いているので、シヤベルカーで何かしているということしかわからない。

私はこの後どうするかを考えた。見回すと道路の反対側は山になっていて、三十メートルくらい手前から藪の中を崖の上のほうに登っていける。私は密集した藪をかき分け、樹につかまりながら登っていた。あまり崖ぎりぎりのところだと姿を見られる

ので、藪の陰から見下ろせるような位置を登った。ちようど樹の陰にしやがむと、高い鉄の塀の上から重機の作業も、トランクが開けっ放しの乗用車も手に取るように見下ろせた。

重機は積み上げられた建設廃材をかき分けながら穴を掘っている。すでに相当深く掘り進んでいるように見える。やがて重機は掘るのをやめて、シヤベルの部分をつらミンゴの首のように伸ばして、乗用

車のトランクの近くにとめた。重機の運転室からサングラスの男が降りた。黄色いヘルメットをかぶっているが、黒っぽいスーツにきちんとネクタイを締めている。私はその男が黒川学に違いないと思った。男は廃材の山から器用に降りてきてトランクの中から何かを抱えだした。かなり大きくて重そうである。それは布袋に入れられたもので、中身は柔らかいもののようだ。私は直感的に人間の死体を想像した。

男はそれを抱えて近くに寄せてある重機のシャベルの中に投げ込んだ。再び男は重機の運転席に上がっていった。そして伸びきっていたシャベルを引き上げて、袋に入った物を掘った穴に落とした。その上から土をかぶせ廃材をかき集めて重ね、最後に大きなコンクリート廃材の塊を重石のように乗せてから、重機をその穴のある所から離れた場所に移した。

作業を終えた男は乗用車まで降りてきてトランク

を閉めた。服の埃を払うようにしてから乗用車の運転席に戻ろうとしたが、そのとき不意に私が潜んでいるあたりを見上げた。私は特に音を立てた覚えは無いが、一瞬の動きが目にとまったのだらうか。男は長い間じっと見上げている。私は半分樹に隠れているが顔は出ていたので、もし男がそれに気づいたら、藪の中に人がいてじっと中の様子を窺がっているのがわかるかも知れない。だが今動くわけにいか

ない。私はまんじりともせずやしやがんでいた。男はかけていたサングラスをはずしてさらに凝視していたが、確認できなかつたのか乗用車に乗り込んだ。

私はその隙にさらに身をかがめて、葉っぱの陰からかろうじて男の動きが見えるように体勢を変えた。男は鉄扉を広く開いて乗用車を外に出すと、重そうな鉄扉をぐいぐい引っ張って閉め、鎖を巻きつけて南京錠をかけた。手を払いながらも一度私が潜ん

でいる方を見上げたが、今度はあつさり車に乗り込んだ。鉄扉を閉めるとき男の車は私の車がとめてある方向を向いていた。私は向きを変えて街の方に走っていくとばかり思っていたが、予想に反して男の車は私の車が停めてある方向に走り去った。私のいる場所から、私の車は見えない。男はその傍を通りぬけて何処かに行つたと思いたかつたが、私の車を見つけて、先ほどチラツとけはいを感じた人間の車

であることに思い至る可能性もある。そう思うと、私はうかつに車に戻れなくなってしまった。男はそんなことは思わずにとうの昔に走り去ってしまったかも知れない。しかし私の車のところに停まって。私が車に戻るのを待っている可能性もある。

陽は西に傾いてもともと日が当たっていないかった藪の中は酷く寒くなってきた。私は寒さと、怖さと、尿意とで震えがとまらない。尿くらい出来たかもし

れないが、その音で男が戻ってきそうな気がして出来なかつた。私は二十分くらいそうして震えていた。さらに陽が傾いたのか、藪の中は薄暗くなってきた。私は自分の車が見えるあたりまで藪の中を下ってみた。二十メートルくらい降りたところであらうじて私の車の後部が半分くらい見えた。そのとき私はドキンと一つ大きな動悸がして心臓が止まったかと思つた。私の車の前にぴたりとさつき黒い高級乗用

車が停まっているではないか。人影は無い。男は必ず私が車にもどると読んで気長に車の中で待っているに違いない。私は藪の中の方に入って、樹の影で男に発見されないような場所にうずくまった。でもさつきよりも道路に近い高さまで降りてきているので、男がその気になったら、すぐに見つかってしまった。辺りはどんどん薄暗くなっていく。

寒さで震えているのに背中は何となく汗で濡れて

いるような感じだ。しやがみこんでいたが、傾斜がある場所なので足元がズズッとずれたりする。男が痺れを切らせて車から出てこちらの方に歩いてきたら見つかってしまう。

私はあの本庁の刑事を思い出した。名刺を貰ったが今は持っていない。駄目だ。しかしもう猶予は無い。私は携帯で百十番した。私は応対に出て緊迫した調子で状況を聞く相手に、これこれの場所の藪の

中で動けなくなっていること、黒川国際建設の工場とそこで今しがた見たこと、マンションの転落死事件のこと、そして本庁の石田という刑事のことなどをめちやくちやな順序で声を殺して話し、救助を求めた。大きな声が出せないので相手は何度も聞き返した。震えていたのでさらに聞き取りにくかったと思う。とにかくすぐ行くからその場で待っているようにいわれた。電話をしたあともう一度乗用車を見

たが、薄暗い中にまださつきと同じ状態で停まっている。私はしやがんだままの姿勢で二度も小用をした。私は小便可さい中にじつとしやがみこんで待った。ますます寒くなってくる。

電話したときの時間を見なかったが、なかなか来ないと思つて時計を見てからでも四十分くらいたつている。非常にまばらだが、その間何台かの車が下

の道を通つていった。

ようやくはるか遠くからパトカーのサイレンが聞こえてきた。サイレンの音はたちまち近づいて、工場の鉄扉の前で停まった。私は転げ落ちるように道路に飛び出し、手を振りながらパトカーに走りよつた。そのとき私の車の方をちらつと見たが、例の乗用車はいなかった。パトカーには二人の警官が乗っていたが、石田という刑事は乗っていないかった。

私は暖房の効いたパトカーの中で落ち着きを取り戻した。あらためていきさつを説明した。私の話を聞いた警官が本庁に指示を仰いでいる。その途中で、石田という刑事が電話に出ているので、直接説明してほしいといわれた。私は今パトカーの警官に話したことをもう一度石田刑事に話した。

そのあとパトカーの警官と石田刑事はさらに話していたが、話がついたと見えて電話は切れた。そし

て警官は、

「ここにまだ残ってもらっても大丈夫ですか」

と私に聞いた。今から石田刑事らが駆けつけるから、いろいろ情報を提供して欲しいというのだ。私は警察に護られながら事件に関われるのなら願ってもない機会だと思ったので勿論了承した。石田刑事らが来るまでの間、この事件についてこれまで見聞きしたことを話した。パトカーの警官よりも事件につい

ては私のほうが詳しいくらいだった。なんだか私が警官二人に向かつて、得意になって話していたような気がする。

さらに一時間以上してから石田刑事の一行が到着した。ワンボックスカーに六人乗っていた。

鉄扉の鎖は切断され、ワンボックスカーとパトカーがヘッドライトで照らす中、一人が難なく重機のエンジンをかけて、私が説明した場所を掘り始めた。

まもなく掘り返したばかりの湿った土が現れ、袋に入つたものも掘り当てられた。私には見せてもらえなかつたが、袋の中身は女性の死体だったそうだ。その間無数の現場写真が撮られた。作業後鉄扉は警察の持つてきた道具で封印された。作業中の物々しさに通行中の車が速度を落として覗き込んでいったが、まさか女の死体が掘り出された現場であることはわからないので、やじ馬が集まるようなことは無

かった。

石田刑事は私に情報提供の礼をいってから、あらためて今日見たことの一部始終を聞きたいので協力して欲しいと聞いた。私は、今日パトカーに乗ってから何度も話したことを、また話した。そのついでに私は、掘り出された死体は長谷川さんかと聞いたが、それには答えてくれなかった。

私の証言によつて、黒川はいずれ捕まるだろう。以前容疑者を確保したといつていたのは黒川のことではなかつたようだ。依然として事件関係者たちの複雑な事情や動機などわからないことばかりだが、私にとつては物書きとして願つてもないような現場を体験できた。

おそらく今後事件が解決されたとしても、その全貌を石田刑事が私に話してくれるようなことはない

だろう。

しかしこの劇的な体験で私は満足した。あとは私の小説の中にこの事件で知ったいくつかの情報を、フィクションとして再構築して、これまでになくなりアルな推理小説が出来そうな気がしている。

(完)

\*この物語はすべてフィクションであり、登場する人物その他はすべて架空のものである。

## 編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな  
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同  
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣  
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。  
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中  
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう  
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの  
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))  
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前についで

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

## 著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も  
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた  
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴  
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの  
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら  
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。  
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

## 今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

### 既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

## 既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

## 三坂峠 二話

第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

第二話 《緑のトンネルで》

## 阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

## 四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットのあゝ風景

「オセロ」の手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

## 紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

## 短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

## 12 カルテット

## 最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

---

## ある三文作家が見たもの

---

2022年6月30日 初版発行

著者 山中興隆

編集発行 山中伶子

表紙素材元：pakutaso.com

ID番号:27922

オルヴィエートの路地裏(イタリア)

作者:Stocker.jp

表紙素材元：illustAC

タイトル:人物 シルエット

窓から覗く人

作者:Tsukaさん

©Tomotaka Yamanaka

<https://www.duoyamanka.com>

---